

平安京右京九条一坊九町跡・唐橋遺跡

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京九条一坊九町跡・唐橋遺跡

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物増築工事に伴う平安京跡・唐橋遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

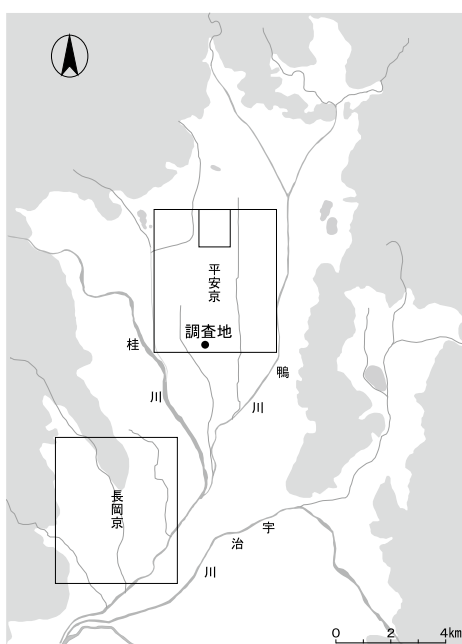
平成28年12月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡・唐橋遺跡（文化財保護課番号 15 H 686）
- 2 調査所在地 京都市南区唐橋門脇町23番地14
- 3 委 託 者 株式会社 長濱製作所 代表取締役社長 立入勘一
- 4 調査期間 2016年5月9日～2016年6月17日
- 5 調査面積 175㎡
- 6 調査担当者 李 銀眞
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「中河原」・「梅小路」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 李 銀眞
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 歴史的環境と立地	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) 遺構の概要	9
(3) 弥生時代から古墳時代の遺構	9
(4) 平安時代の遺構	14
4. 遺 物	17
(1) 弥生時代から古墳時代の遺物	17
(2) 平安時代の遺物	18
5. ま と め	20

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区弥生時代から古墳時代全景（北東から）
		2	2区弥生時代から古墳時代全景（北から）
図版2	遺構	1	1区方形周溝墓1（北西から）
		2	土坑47（北東から）
		3	土坑47土器出土状況（北東から）
図版3	遺構	1	2区平安時代全景（北から）
		2	建物1（北から）
図版4	遺構	1	建物1柱穴15断面（東から）
		2	建物1柱穴15礎石検出状況（東から）
		3	建物1柱穴16断面（東から）
		4	建物1柱穴18断面（西から）
		5	建物2（北から）
		6	拡張区1全景（北から）
図版5	遺物		出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：2,500）	1
図2	調査前全景（南から）	2
図3	作業風景（南東から）	2
図4	作業風景（北西から）	2
図5	現地説明会風景（北東から）	2
図6	調査区配置図（1：500）	2
図7	西寺関連発掘調査位置図（1：2,500）	4
図8	調査区断面図（1：100）	10
図9	調査区平面図（1：120）	11
図10	方形周溝墓1・2断面図（1：40）	12
図11	土坑47実測図（1：20）	13
図12	土坑48実測図（1：40）	14
図13	土坑1実測図（1：20）	14
図14	建物1・柱穴23実測図（1：60）	15
図15	建物2実測図（1：50）	16
図16	柱穴42～44実測図（1：50）	16
図17	弥生時代から古墳時代の遺物実測図（1：4）	18
図18	平安時代の遺物拓影及び実測図（1：4）	19

表 目 次

表1	西寺関連発掘調査一覧表	5
表2	遺構概要表	9
表3	遺物概要表	17

平安京右京九条一坊九町跡・唐橋遺跡

1. 調査経過（図1）

今回の発掘調査は、株式会社長濱製作所増築工事に伴うものである。調査地は京都市南区唐橋門脇町23番地14に所在する。調査地は遺跡地図によると、平安京右京九条一坊九町（西寺跡）及び弥生時代から古墳時代の遺跡である唐橋遺跡にあたる。発掘調査に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）によって試掘調査が実施され、平安時代の柱穴や弥生時代の溝などが検出された。これを受けて文化財保護課は埋蔵文化財調査の指導を行い、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

調査区は、文化財保護課の指導の下、建設予定地と試掘調査成果を考慮して、南北約21m、東西約8m、約168㎡を設定した。調査は2016年5月9日から開始した。残土置き場を確保する都合から、調査区を南北に分割し、反転して掘削作業・記録作業を行った。北側の調査区を1区、南側の調査区を2区とした。2区の調査では、針小路の道路敷設状況や弥生土器が出土した土坑の規模を明らかにするため、文化財保護課の指導と委託者の了解のもとに、2区の南側に拡張区を2箇所

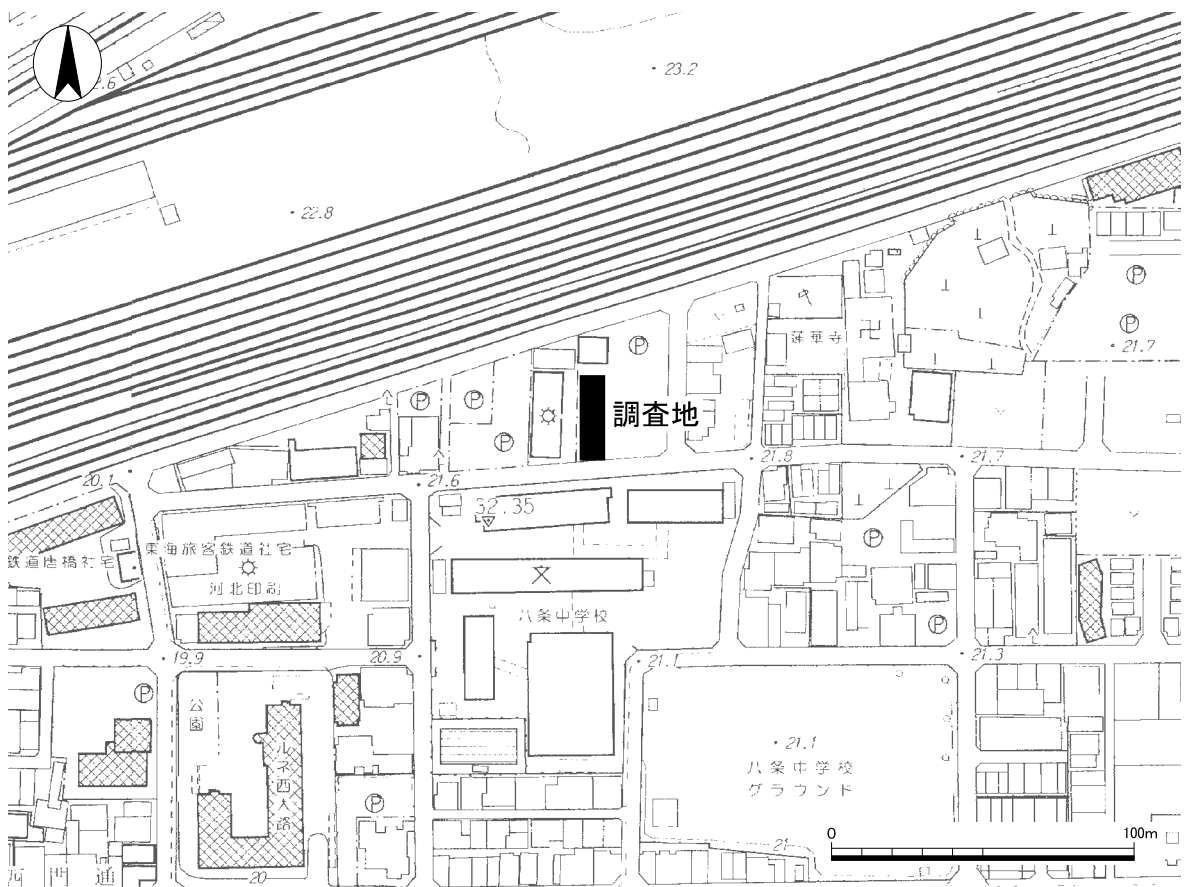


図1 調査地位置図（1：2,500）



図2 調査前全景（南から）



図3 作業風景（南東から）



図4 作業風景（北西から）



図5 現地説明会風景（北東から）

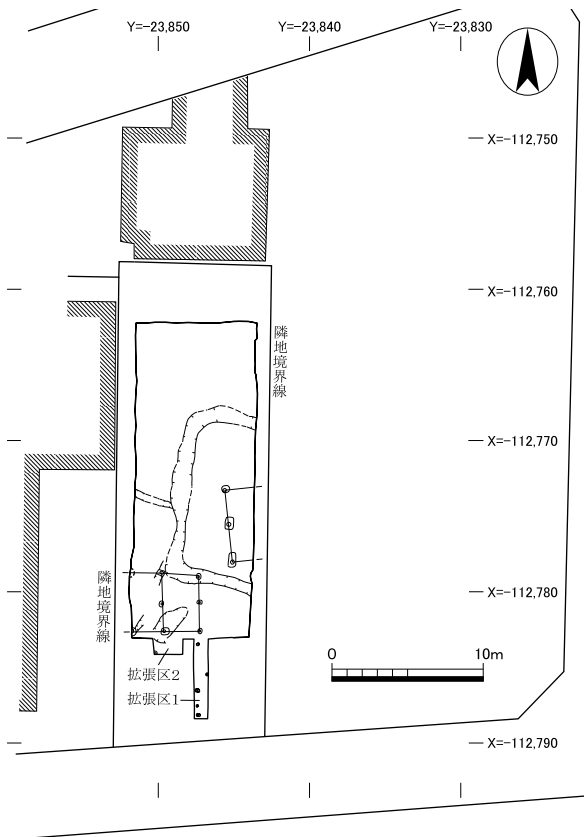


図6 調査区配置図（1：500）

（拡張区1・2）を設定した。拡張区1は南北約5m、東西約1mであり、拡張区2は南北約1m、東西約2mである。調査面積は総計175㎡である。

調査は重機により現代盛土及び近代耕作土を掘削し、その後は人力により調査を進めた。遺構面は地山上面で弥生時代と平安時代の2時期の遺構を検出した。調査は1区・2区の順に行い実測図の作成・写真撮影などの記録作業を行い、2016年6月17日に終了した。

なお、調査中は適宜、文化財保護課の臨検を受けた。また、調査期間中の6月11日には、長濱製作所関係者及び地元住民を対象にした現地説明会を開催し、調査成果を説明した。説明会には約100名の参加があった。

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

西寺は平安遷都（794）の時に、東寺（教王護国寺）とともに国家鎮護・王室繁栄を祈って造営された官営の寺院である。東寺・西寺は平安京の南辺、平安京の中央を南北に通る朱雀大路南端の羅城門を挟んで対称の位置に配置され、左大寺・右大寺とも称した。西寺の寺域は、右京九条一坊九町から十六町で、東寺と同様に計8町を占有する。つまり、南は九条大路（現九条通）、西は西大宮大路（現御前通辺り）、北は八条大路（現八条通）、東は皇嘉門大路（現七本松通辺り）に囲まれる範囲である。

西寺に関連する史料は乏しく、造営過程については必ずしも明確ではない。西寺の造営が史料に現れるのは、『類聚国史』の延暦十六年（797）四月四日条に笠朝臣江人が「造西寺次官」に任命されると記されているのが初見である。¹⁾鎌倉時代に編纂された『帝王編年記』の延暦十五年（796）に、藤原伊勢人が東寺・西寺の造寺長官に任命されており²⁾、これらの造寺官の存在から、遷都後の早い段階で本格的に造営が開始されたと考えられる³⁾。

『日本後紀』によると、弘仁四年（813）の正月に東寺・西寺で初めて「坐夏」の儀式が実施されたという記事がある⁴⁾。また、『日本紀略』の天長元年（824）に「以綿一万屯、施東西両寺并大寺及五畿内諸寺常住僧尼」と記されており⁵⁾、「常住僧尼」があることから、この頃には中門や金堂などは完成していた可能性が高いと考えられる。その後、『日本紀略』の天長九年（832）に「西寺講堂供養御願新造佛。莊嚴法物一十五種、便即施入」と記されており⁶⁾、この頃は講堂が完成していたと考えて良いだろう。塔は、『日本三代実録』元慶六年（882）に「造西寺塔料」が施入されたという記事があり⁷⁾、この頃から塔の造営が開始されたと考えられる。

ところが、国家鎮護の寺として栄えた西寺は、正暦元年（990）二月二日の焼亡⁸⁾より、一つの転機を迎えることになる。『日本紀略』によると、西寺が焼亡し再建するまでの間、西寺で行う国忌を東寺に移して行っていたようであるが⁹⁾、焼失や再建の規模は明らかではない。その後、保延二年（1136）に南院が焼亡しており、天福元年（1233）には再建された塔が再び焼失したが、再建されることなく、廃絶していたと考えられている¹⁰⁾。

東寺は、弘仁十四年（823）、空海に下賜され、真言宗の総本山として現在まで栄えているのに対し、西寺は早くから衰退し、現在は講堂跡を中心とした周辺が史跡公園として保存されているのみである。しかし、これまで数次にわたる発掘調査が行われ、西寺の伽藍配置が明らかになりつつある。境内の南側4町には主要伽藍、北側4町には西寺造営に関連する付属施設が存在していたと考えられている¹¹⁾。調査地はこのうち、大衆院と推定されている。

(2) 既往の調査（図7、表1）

西寺に関する調査は、すでに大正8年（1919）から現状調査が行われ、その成果を受けて大正10

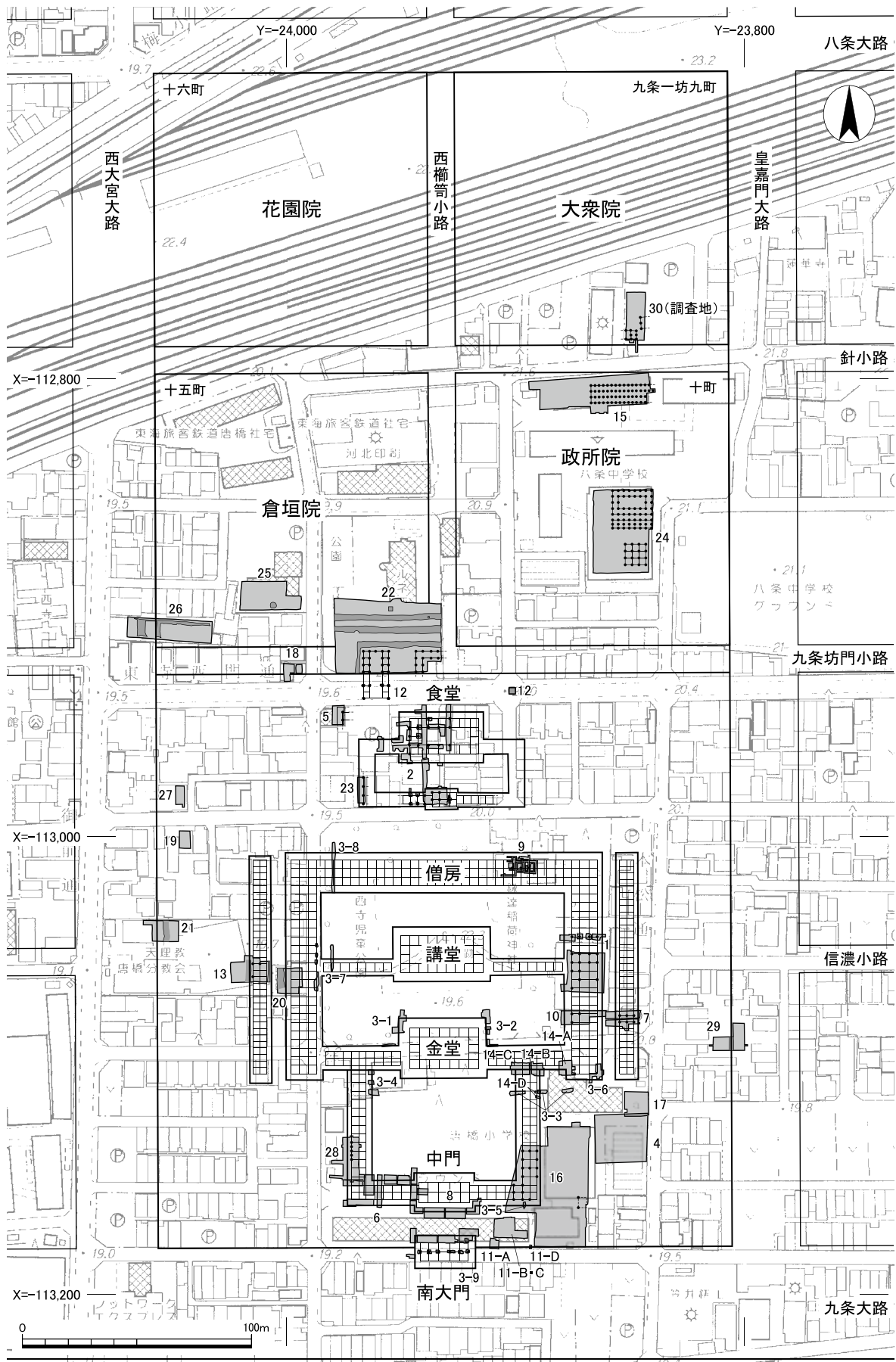


図7 西寺関連発掘調査位置図 (1:2,500)

表1 西寺関連発掘調査一覧表

調査 回数	既往の調査回数*1				推定地	調査地	調査期間	調査機関*2	調査担当者	調査成果	文献
	杉山	堀内	概要	柏田							
1	1	I	—	1	東僧坊	唐橋西寺町57 (西寺児童公園)*3	1960/06/18 ～06/26	奈文研	杉山信三	基壇、礎石抜き取り穴、礎石	1・2・3
2	2	II	—	2	食堂院	唐橋西寺町	1962/02/19 ～03/12	奈文研	杉山信三	南門と回廊の礎石・礎石抜き取り穴	1・2・3
3	3	III	—	3	食堂・南大門・東 西僧坊・東小子房	唐橋西寺町57ほか (西寺児童公園・唐橋小 学校・周辺道路)	1962/09月 ～12月	奈文研	杉山信三	金堂基壇延石・地覆石、南大門 礎石抜き取り穴、東僧坊雨落ち 溝・延石、西僧坊礎石抜き取り 穴、東回廊延石、東小子房	1・2・4
4	4	IV	—	4	推定国忌堂	唐橋西寺町65 (唐橋小学校内プール)	1970/07/14 ～08/08	市教委・ 平博	伊藤玄三	東西方向の築地遺構、大溝	1
5	5	V	—	5	大炊殿	唐橋西寺町40	1972/11月 ～12月	市保護課 ・鳥羽研	峰 巍・ 浪貝 毅	礎石抜き取り穴	1・5
6	6	VI	—	6	中門・西回廊	唐橋西寺町65(唐橋小 学校内グラウンド)	1973/07/25 ～08/20	市教委・ 鳥羽研	杉山信三	中門西縁基壇、西回廊雨落ち溝 ・暗渠	1
7	7	VII	—	7	東小子房	唐橋西寺町64	1973/09/20 ～10/10	市保護課	浪貝 毅・ 玉村登志夫	雨落ち溝、ピット群	1・6
8	8	VIII	—	8	中門・東回廊・ 南大門	唐橋西寺町65(唐橋小 学校内グラウンド)	1974/05/03 ～06/15	市教委・ 鳥羽研	杉山信三	中門延石・階段、東回廊延石	1
9	9	IX	—	9	北僧坊	唐橋西寺町57-1・2 (鎌達稲荷神社)	1974/06/25 ～07月	市保護課	梶川敏夫	礎石抜き取り穴	1・7
10	—	1	10	10	東僧坊	唐橋西寺町57(西寺児童 公園内ちびっこプール)	1977/05/16 ～06/04	市埋文	長宗繁一・ 吉川義彦	基壇西辺、礎石抜き取り穴、雨 落ち溝	8a・9a
11	—	2	11	11	南限築地	唐橋西寺町65 (唐橋小学校)	1977/08/01 ～08/23	市埋文	本 弥八郎	柱穴、溝状遺構	9b
12	—	3	12	12	大炊殿・井戸	唐橋西寺町86	1978/01/10 ～01/27	市埋文	鈴木広司・ 長宗繁一	西限築地の凝灰岩暗渠、石籠組 井戸	8b・9c
13	—	4	13	13	西小子房	唐橋西寺町27 (天理教唐橋分教会)	1977/11/07 ～11/30	市埋文	鈴木広司	基壇、礎石抜き取り穴、溝	9d
14	—	5	14	14	東僧坊・東回廊・ 金堂東軒廊	唐橋西寺町65 (唐橋小学校)	1978/08/24 ～08/31	市埋文	百瀬正恒	東僧坊礎石抜き取り穴・雨落ち 溝、東回廊礎石、東軒廊基壇・ 延石	10・11b
15	—	A	—	15	西寺子院	唐橋門脇町35 (八条中学校)	1978/11/21 ～1979/03/06	市埋文	平方幸雄	南北三間、東西十四間以上の掘 立柱建物	11a
16	—	6	15	16	東回廊・推定国忌 堂西築地・門跡	唐橋西寺町65 (唐橋小学校)	1979/01/27 ～03/31	市埋文	堀内明博・ 本 弥八郎	東回廊基壇・礎石抜き取り穴・ 延石、築地状遺構・雨落ち溝	11c
17	—	7	16	17	境内	唐橋西寺町65 (唐橋小学校)	1979/06/01 ～06/21	市埋文	磯部 勝・ 辻 純一	土坑、瓦溜り	12
18	—	8	17	18	境内	唐橋門脇町2	1980/05/16 ～05/25	市埋文	鈴木広司	溝、井戸、土坑	13a・14a
19	—	9	18	19	境内	唐橋西寺町33-3	1980/06/23 ～07/07	市埋文	堀内明博	土坑、集石	13b・14b
20	—	10	19	20	西僧坊	唐橋西寺町30 (天理教唐橋分教会)	1980/08/01 ～08/13	市埋文	長宗繁一	基壇、土坑	13c・14c
21	—	11	20	21	西限築地	唐橋西寺町30 (天理教唐橋分教会)	1981/02/03 ～02/20	市埋文	平尾政幸	築地状遺構	13d・14d
22	—	12	—	23	北限築地・綱所	唐橋門脇町29・30・31 ・44の一部	1986/06/02 ～10/06	市埋文	鈴木久男・ 磯部 勝・ 堀内明博	礎石建物、築地跡、塀跡、井戸、 土坑	16a
23	—	13	—	22	食堂院	唐橋西寺町55-2	1986/11/05 ～11/19	市埋文	堀内明博	西回廊基壇、礎石抜き取り穴、 溝、金属製品工房か	15・16b
24	—	—	—	24	西寺子院	唐橋門脇町35 (八条中学校)	1988/09/08 ～12/28	市埋文	菅田 薫	掘立柱建物、礎石建物	17a
25	—	—	—	25	西寺子院	唐橋門脇町6・7	1989/01/17 ～03/15	市埋文	菅田 薫	柱穴、溝、土坑、井戸	17b
26	—	—	—	—	西限築地	唐橋門脇町4-1	1990/11/08 ～12/20	関文会	吉川義彦・ 鎌田博子	築地跡	未報告
27	—	—	—	26	西限築地	唐橋西寺町35-12	2007/02/16 ～03/02	市埋文	能芝妙子	湿地状堆積、土坑、柱穴	18
28	—	—	—	27	西回廊	唐橋西寺町69 (唐橋小学校)	2007/07/23 ～08/20	市埋文	柏田有香	柱穴、溝、西回廊基壇整地土	19
29	—	—	—	—	東限築地	唐橋花園町9-8、9-9、 9-11	2013/11/18 ～12/10	市埋文	東 洋一	築地底部	20
30	—	—	—	—	西寺子院	唐橋門脇町23-14	2016/05/09 ～06/17	市埋文	李 銀眞	建物跡	本報告

*1 既往の調査回数：「杉山」は文献1、「堀内」は文献15、「概要」は文献9・11・12・14、「柏田」は文献19

*2 調査機関：「市埋文」は財団法人京都市埋蔵文化財研究所（2013年10月より公益財団法人）、「奈文研」は奈良国立文化財研究所、「市保護課」は京都市文化観光局文化財保護課、「平博」は平安博物館、「鳥羽研」は鳥羽離宮跡調査研究所、「市教委」は京都市教育委員会、「関文会」は関西文化財調査会を指す。

*3 調査地の括弧には、2016年7月現在とする。

年(1921)に国の史跡に指定されている¹²⁾。本格的な発掘調査は、京都府教育庁文化財保護課が昭和34年(1959)に東僧房の礎石や基壇を検出してからである。それ以降、奈良国立文化財研究所・鳥羽離宮跡調査研究所・当研究所などによりこれまで数次にわたる調査が行われ、西寺の伽藍の様相が徐々に明らかになってきた。

ところで、西寺の発掘調査次数は、これまで調査報告書などの刊行物では統一されておらず、調査地の位置や成果・現状を認識することが非常に困難な状況となっていた。そこで今回、未報告の過去調査も含め、これまでの発掘調査に新たに番号を付け直して発掘調査の次数の統一を行った。また、各既刊文献における発掘調査次数との対応関係を明示する。今後、発掘調査が行われた際は、これに続く順に調査次数を付けていくことにしたい。今回の発掘調査は30次調査にあたる。

主要伽藍に関する各々の調査の概要は、表1の西寺関連調査一覧表に拠ることとし、以下では、今回の調査地と関係する寺域北半の調査15・22・24～26の成果を記述する。

西寺の付属施設に関わる建物遺構が初めて検出されたのは調査15である。八条中学校北校舎の建て替え工事に伴う発掘調査によって、桁行十五間以上、梁行三間の北に庇が付く長大な東西棟の掘立柱建物が検出された。

また、八条中学校内の体育館改築工事に伴った調査24では、建物跡3棟が検出された。桁行五間、梁行二間の四面庇建物と、その南に接した位置で桁行七間、梁行二間の建物が検出された。さらにその南で桁行三間、梁行三間の総柱礎石建物が検出された。これらは、『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』『興福寺資材帳』に記される「政屋」や、奈良時代寺院の大安寺内に存在する「政所院」と同規模であることから、西寺の経営に関わる「政所院」に推定された¹³⁾。

調査22は、平安京右京九条一坊十四・十五町で行われ、瓦葺きの築地塀や2棟の礎石建物跡が検出された。築地跡は、九条坊門小路の北築地推定ラインよりも北側で検出された。この位置は、現存している東寺の北大門に取り付いている築地塀とほぼ同一線上にあることが確認された。しかしながら、東寺北大門に相当する位置では門跡が検出されなかったため、西寺の北大門は穴門であった可能性が考えられている。

調査25では、焼土・灰炭を多量に含む鉄滓・韃羽口が多く出土した土坑を検出した。建物跡は見つかっていないものの、この土坑の存在により、付近に工房跡の存在を考え、「修理所」に比定された。

調査26は、十五町の南西側で行われたが、西大宮大路の東側溝とともに、東西の溝が検出された¹⁴⁾。東西の溝は、調査22でみつかった築地塀の側溝に繋がると思われる。

註

- 1) 『類聚国史』卷一〇七、「桓武天皇延暦十六年二月甲申・・・従五位上守民部大輔兼行造西寺次官信濃守笠朝臣江人於右京職」
- 2) 『帝王編年紀』卷十二、「延暦十五年丙子 以大納言藤原伊勢人 為造寺長官 建立東西両寺以為東西両京鎮護」

- 3) 一方、平安時代の末期に編纂された『伊呂波字類抄』によると、西寺の創立を延暦六年（787）としている（同書「左」の項）。しかし、この年代は平安京遷都の7年前のことで、長岡造都を督励する詔のたされた年でもあり、平安遷都と混同されたものと考えられているようである。この記事に関する信憑性には問題が残るのが現状である。
- a.京都市編「東・西寺の造営」『京都の歴史 1 平安の新京』學藝書林 1980年 pp.366
- b.追塩千尋「西寺の沿革とその特質」『北海学園大学人文論集』第23・24号 北海学園大学人文学会 2003年
- 4) 『日本後紀』卷第二十二、弘仁四年一月十九日条。
- 5) 『日本紀略』天長元年九月二十七日条。
- 6) 『日本後紀』卷第四十、天長九年七月乙未条。
- 7) 『日本三代実録』卷第四十二、元慶六年六月条。
- 8) 『日本紀略』正暦元年二月二日戊申条。
- 9) 『日本紀略』正暦元年八月廿六日戊辰条。
- 10) 建久年中（1190～1199）に文覚が西寺塔の修理を行った際に、その様子を明恵が見物していたということや、『二水記』大永七年（1527）に西寺に戦陣が敷かれたという記録があることから、12世紀末または戦国時代の中期頃までは西寺が存続していたと推測する説もある。
- 前掲註3) b
- たなかしげひさ「にし寺興亡の研究（一～五）」『史迹と美術』363～366号・368号 綜芸社 1966年
- 11) 杉山信三「東寺と西寺」『平安京提要』角川書店 1994年
- 12) 梅原末治「西寺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第二冊 1920年。この報告書では、現在も史跡公園に残っている講堂址の土壇を「金堂址」として報告されている。
- 13) 杉山信三「東寺と西寺」『平安京提要』角川書店 1994年 pp.378・382・383
- 14) 調査26は未報告。京都市文化財保護課の御教示による。

文献（表1 西寺関連発掘調査一覧表）

- 1 杉山信三『史跡 西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所 1979年
- 2 杉山信三「2 西寺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1964年
- 3 杉山信三「西寺跡発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1962』奈良国立文化財研究所 1962年
- 4 杉山信三「西寺跡第3次発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1963』奈良国立文化財研究所 1963年
- 5 杉山信三・井上満郎・木村捷三郎・浪貝 毅「史跡西寺跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告 1972』鳥羽離宮跡調査研究所 1974年
- 6 浪貝 毅・玉村登志夫「西寺跡発掘調査概要」『史跡 西寺跡・鳥羽離宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告 1973 - II』京都市文化観光局文化財保護課 1975年
- 7 梶川敏夫「史跡 西寺跡 - 北僧房跡発掘調査概要 -」『鳥羽離宮跡・史跡 西寺跡 京都市埋蔵文化財年次報告1974 - IV』京都市文化観光局文化財保護課 1975年
- 8 a 長宗繁一・鈴木久男「V 西寺東僧房跡」『平安京跡発掘調査概報 1977年』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1978年
- b 長宗繁一・鈴木久男「VI 西寺井戸跡」同上

- 9 a 「24 平安京右京九条一坊、西寺跡 1」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- b 「25 平安京右京九条一坊、西寺跡 2」同上
- c 「26 平安京右京九条一坊、西寺跡 3」同上
- d 「27 平安京右京九条一坊、西寺跡 4」同上
- 10 百瀬正恒「平安京西寺跡」『平安京跡発掘調査概要』京都市埋蔵文化財研究所概要集1978 京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1979年
- 11 a 「40 平安京右京九条一坊十町」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- b 「41 平安京右京九条一坊・西寺跡 1」同上
- c 「42 平安京右京九条一坊、西寺跡 2」同上
- 12 「平安京右京九条一坊十二町・西寺跡」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 13 a 鈴木廣司「西寺跡発掘調査 第17次発掘調査」『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- b 堀内明博「西寺跡発掘調査 第18次発掘調査」同上
- c 長宗繫一「西寺跡発掘調査 第19次発掘調査」同上
- d 平尾政幸「西寺跡発掘調査 第20次発掘調査」同上
- 14 a 「33 平安京右京九条一坊、西寺跡 1」『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- b 「34 平安京右京九条一坊、西寺跡 2」同上
- c 「35 平安京右京九条一坊、西寺跡 3」同上
- d 「36 平安京右京九条一坊、西寺跡 4」同上
- 15 堀内明博「Ⅱ 西寺跡第13次調査」『平安京跡発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
- 16 a 磯部 勝・鈴木久男・堀内明博「14 平安京右京九条一坊 1」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- b 堀内明博「15 平安京右京九条一坊 2」同上
- 17 a 菅田 薫「26 平安京右京九条一坊 1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- b 菅田 薫「27 平安京右京九条一坊 2」同上
- 18 能芝妙子「Ⅴ 平安京西寺跡・唐橋遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
- 19 柏田有香『平安京跡・史跡西寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-4 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 20 東 洋一「Ⅴ 平安京右京九条一坊十二町・西寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図8)

調査地の現地表面の標高は21.3～21.7mで、北から南へわずかに下がっており、比高差は約0.4mである。現地表面から-0.5mまでが現代の盛土で、その下に黒褐色泥砂を主体とする近代耕作土が厚さ約0.1m堆積する。それを除去すると、にぶい黄褐色を主体とするシルト層と多量に礫の混じる砂礫の地山層となる。この地山層を切り込んで各時代の遺構が成立している。遺構検出面の標高は20.75～21.14mである。

(2) 遺構の概要 (表2)

遺構はすべて地山上面で検出し、弥生時代から古墳時代と平安時代の遺構を検出した。検出した遺構総数は49基である。主な遺構は、弥生時代の方形周溝墓2基と土坑、平安時代の建物跡2棟に伴う柱穴列がある。

弥生時代の遺構では、1・2区につながる形で方形周溝墓1を検出し、2区で方形周溝墓2を検出した。土坑47では、弥生土器壺2個体がほぼ完形で検出された。

平安時代の建物は、すべて2区で検出している。いずれも調査区外へと延びているので規模は明らかではないが、小規模な掘立柱建物と考えられる。ほか、建物としてのまとまりは捉えられなかったが、検出した小穴遺構のうち、柱痕跡を検出したものは柱穴として報告する。

以下では、時期の古い順に主な遺構について報告する。なお、平安時代の遺構及び出土遺物の時期については、平安京・京都土器編年案に¹⁾拠る。

(3) 弥生時代から古墳時代の遺構 (図9、図版1)

方形周溝墓1 (図10・12、図版2) 1・2区の東半部で検出した一辺11.8mの周溝墓である。周溝は幅0.74～0.85m、深さ0.12～0.28mで、周溝の北・西・南辺の3辺を検出した。溝の断面形状は逆台形で、埋土は暗褐色粘質シルト(10YR3/3)などからなる。南北溝の方位は北に対して約9°東に振れる。主体部・埋葬施設は確認されなかった。遺物は、南西辺の周溝から弥生土器の口縁部から頸部の破片が底から少し浮いた状態で出土した(図12)。出土遺物から弥生時代中期後半と考える。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
弥生時代～古墳時代	方形周溝墓1・2、土坑1・47・48	
平安時代	建物1(柱穴13～16・18～20)、建物2(柱穴31～33)、柱穴23・42～44	

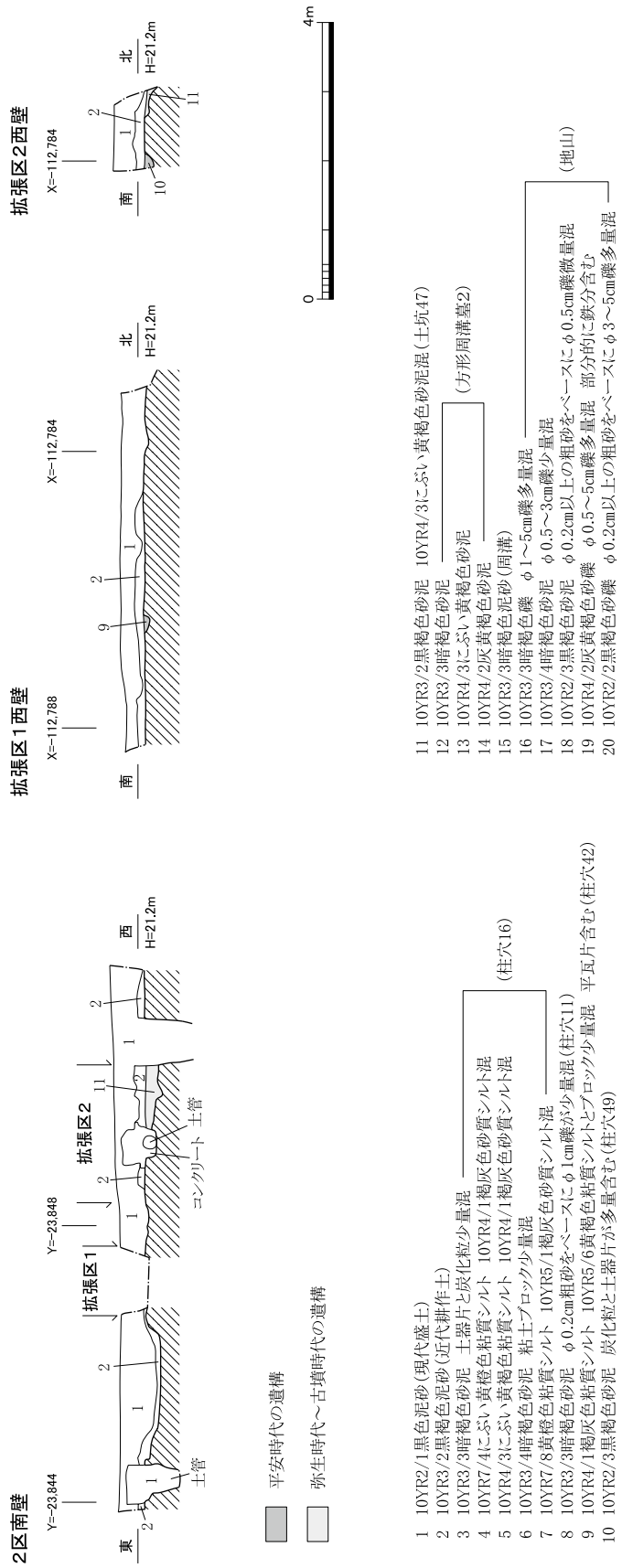
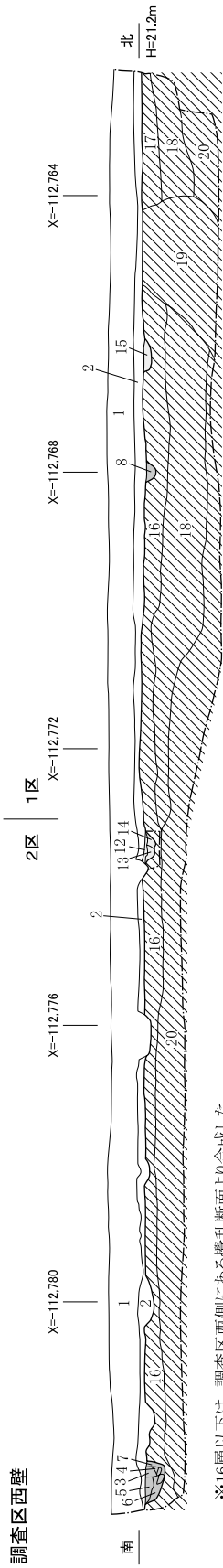


図8 調査区断面図 (1 : 100)

- 1 10YR2/1黒色泥砂(現代盛土)
- 2 10YR3/2黒褐色泥砂(近代耕作土)
- 3 10YR3/3暗褐色砂泥 土器片と炭化粒少量混
- 4 10YR7/4にぶい、黄褐色粘質シルト 10YR4/1褐灰色砂質シルト混
- 5 10YR4/3にぶい、黄褐色粘質シルト 10YR4/1褐灰色砂質シルト混
- 6 10YR3/4暗褐色砂泥 粘土ブロック少量混
- 7 10YR3/3暗褐色砂泥 10YR5/1褐灰色砂質シルト混
- 8 10YR3/3暗褐色砂泥 φ0.2cm粗砂をベースにφ1cm礫が少量混(柱穴11)
- 9 10YR4/1褐灰色粘質シルト 10YR5/6黄褐色粘質シルトとブロック少量混 平瓦片含む(柱穴42)
- 10 10YR2/3黒褐色砂泥 炭化粒と土器片が多量含む(柱穴49)
- 11 10YR3/2黒褐色砂泥 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥混(土坑47)
- 12 10YR3/3暗褐色砂泥
- 13 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥 (方形周溝墓2)
- 14 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 15 10YR3/3暗褐色泥砂(周溝)
- 16 10YR3/3暗褐色礫 φ1~5cm礫多量混
- 17 10YR3/4暗褐色砂泥 φ0.5~3cm礫少量混
- 18 10YR2/3黒褐色砂泥 φ0.2cm以上の粗砂をベースにφ0.5cm礫微量混
- 19 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ0.5~5cm礫多量混 部分的に鉄分を含む(地山)
- 20 10YR2/2黒褐色砂泥 φ0.2cm以上の粗砂をベースにφ3~5cm礫多量混

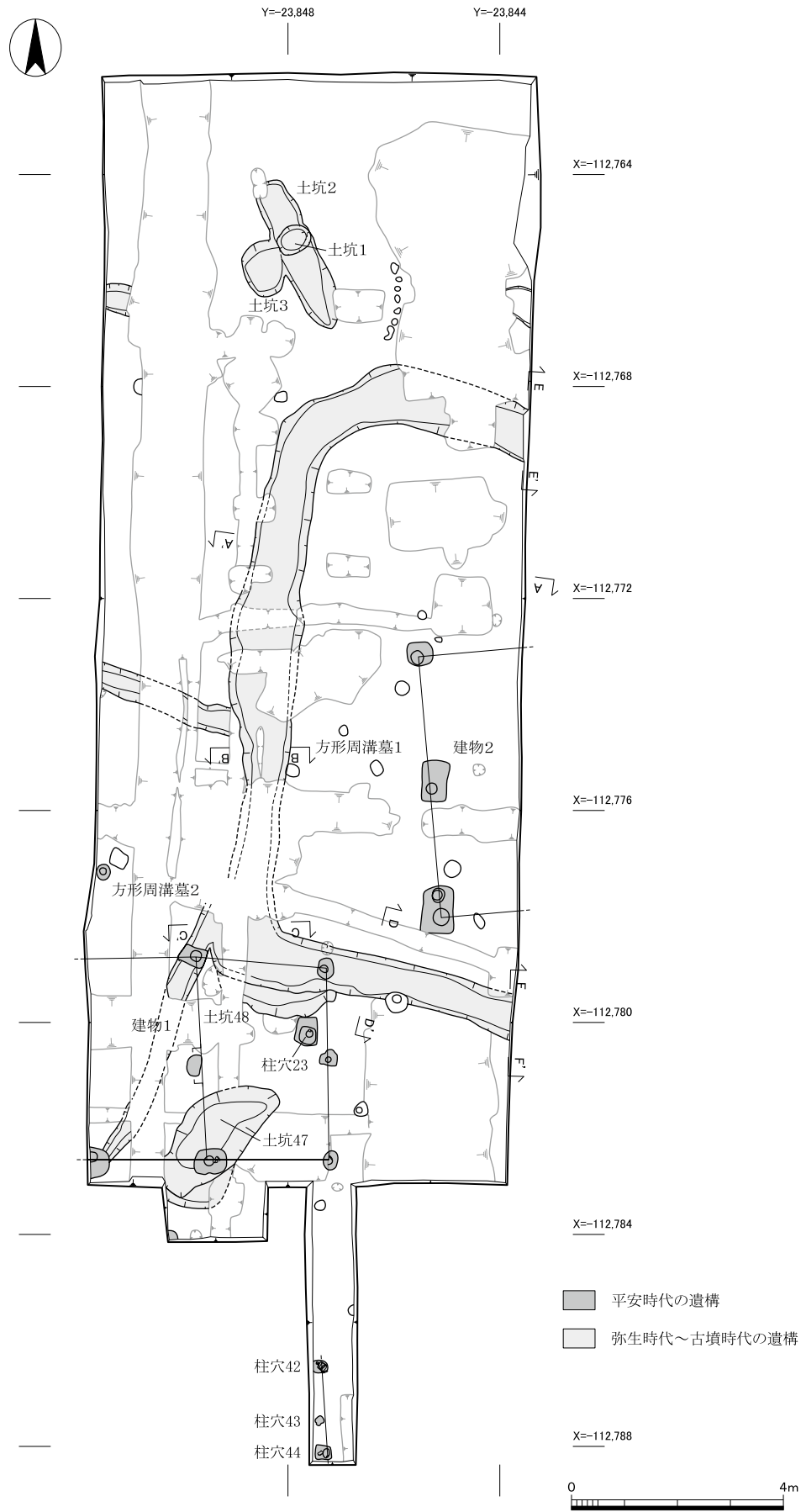
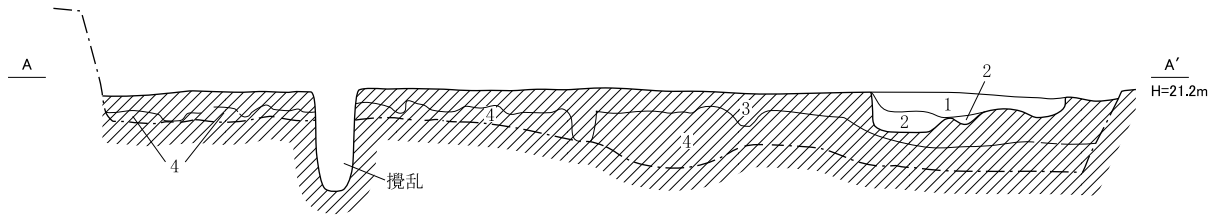
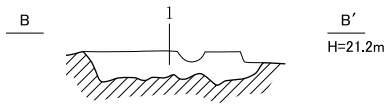


図9 調査区平面図 (1 : 120)



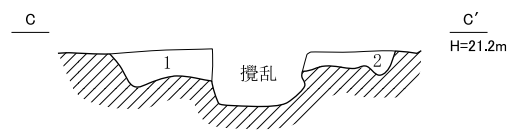
Aライン

- 1 10YR3/3暗褐色粘質シルト 10YR3/1黒褐色粘質シルトが少量混 (周溝墓1)
- 2 10YR4/4褐色粘質シルト 10YR3/2黒褐色粘質シルトブロック混
- 3 10YR5/8黄褐色粘質シルト 10YR暗褐色粘質シルト混
- 4 10YR4/2灰黄褐色粘質粗砂 φ1~5cmの礫多量混 (地山)



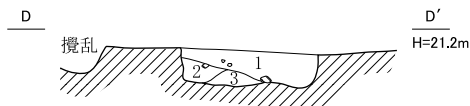
Bライン

- 1 10YR3/3暗褐色粘質シルト 土器片・木炭粒少量混(周溝墓1)



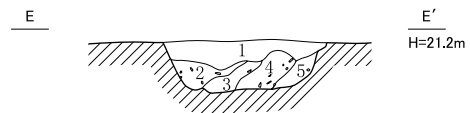
Cライン

- 1 10YR3/3暗褐色粘質シルト 10YR3/3暗褐色粘質シルト少量混(周溝墓1)
- 2 10YR4/1褐灰色粘質シルト 10YR5/6黄褐色粘質シルトと 10YR3/1黒褐色粘質シルトが少量混(周溝墓2)



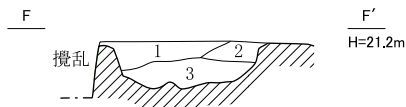
Dライン

- 1 10YR3/3暗褐色粘質シルト 10YR4/4褐色砂質シルトと 10YR2/1黒色粘質シルトが小ブロック状に混入 (周溝墓1)
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト 10YR3/2黒褐色粘質シルト少量混
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト 10YR3/1黒褐色粘質シルト混



Eライン

- 1 10YR3/3暗褐色粘質シルト
- 2 10YR4/4褐色砂泥 粘土小ブロックとφ1~2cmの礫多量混 (周溝墓1)
- 3 10YR4/6褐色砂泥 粘土小ブロックとφ1~2cmの礫少量混 (周溝墓1)
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 φ1~2cmの礫多量混
- 5 10YR3/3暗褐色泥砂 粘土ブロック混



Fライン

- 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ1~2cmの砂少量混 (周溝墓1)
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 10YR3/2黒褐色砂泥のブロック少量混

※ 断面の位置は図9参照



図10 方形周溝墓1・2断面図 (1:40)

方形周溝墓2 (図10) 2区の南西端で検出した一辺が9 m以上の周溝墓である。周溝は北・東の2辺しか確認できなかったため、全体の大きさは不明である。周溝は幅0.35～0.56 m、深さ0.8～0.2 mで、周溝墓の東辺と北辺の一部を検出した。東辺の溝の方位は北に対して約19° 東に振れる。断面形は逆台形であり、埋土はにぶい黄褐色砂泥 (10YR4/3) からなる。遺物の出土はない。主体部・埋葬施設は確認されなかった。方形周溝墓1・2の交差する箇所が攪乱を受けているため、先後関係に関する詳細は不明である。

土坑47 (図11、図版2) 2区の南西端で検出した。土坑の規模を確認するために、2区の南壁に東西5 m、南北1 mの拡張区2を設定した。東西1.3 m、南北2.8 m以上、深さ0.72 mの長細い土坑である。土坑中央で弥生時代中期前半の壺2個体が南北に並んだ状態で出土した。埋土は黒褐色砂泥 (10YR3/2) で、にぶい黄褐色砂泥 (10YR4/3) が混じる。

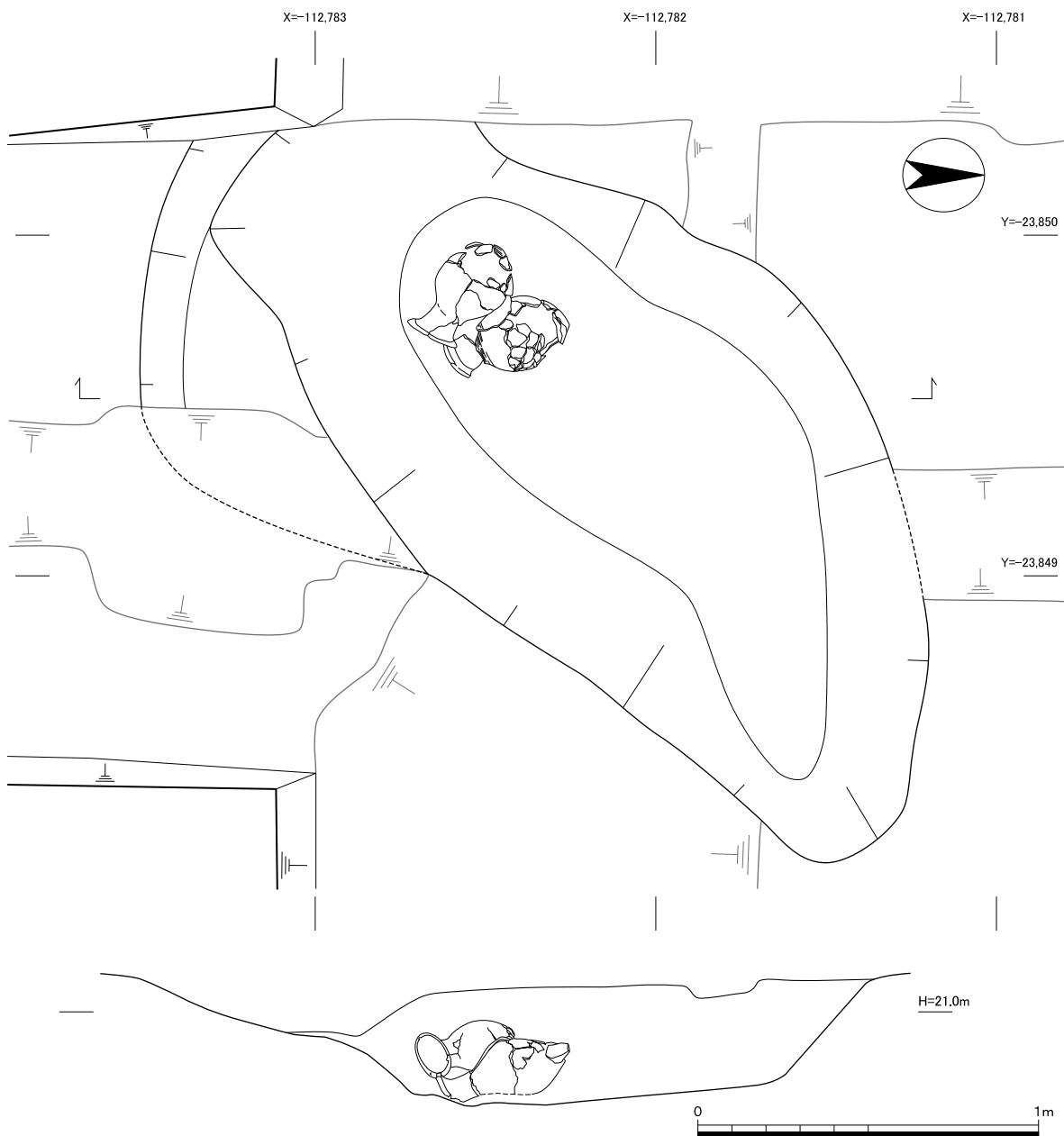


図11 土坑47実測図 (1 : 20)

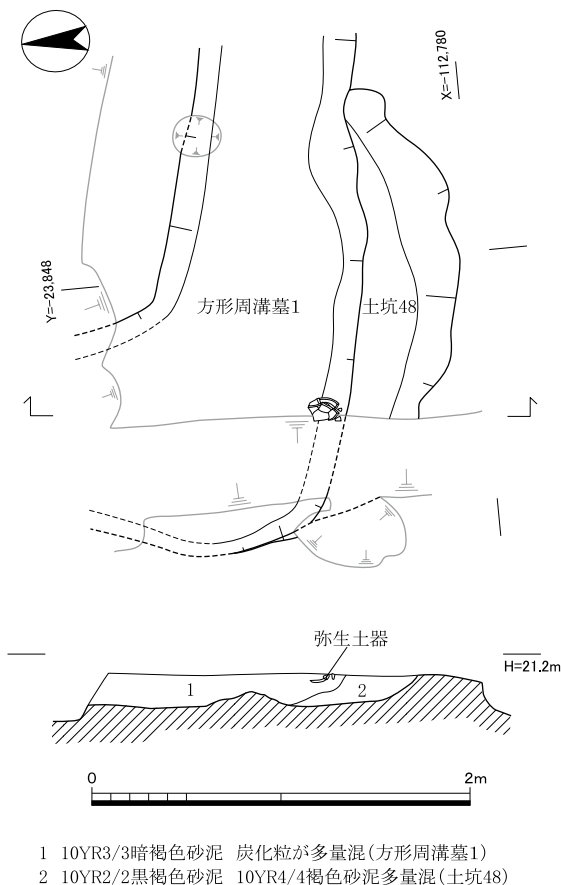


図12 土坑48実測図(1:40)

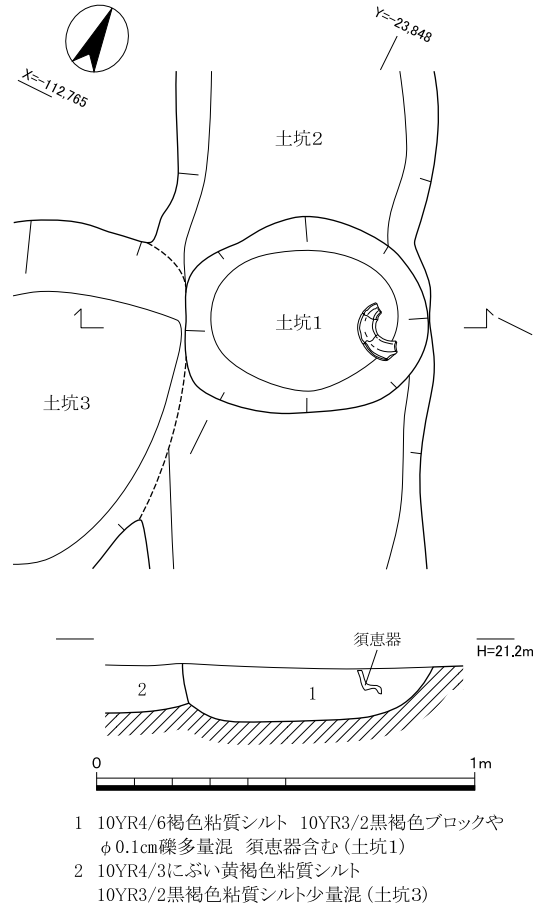


図13 土坑1実測図(1:20)

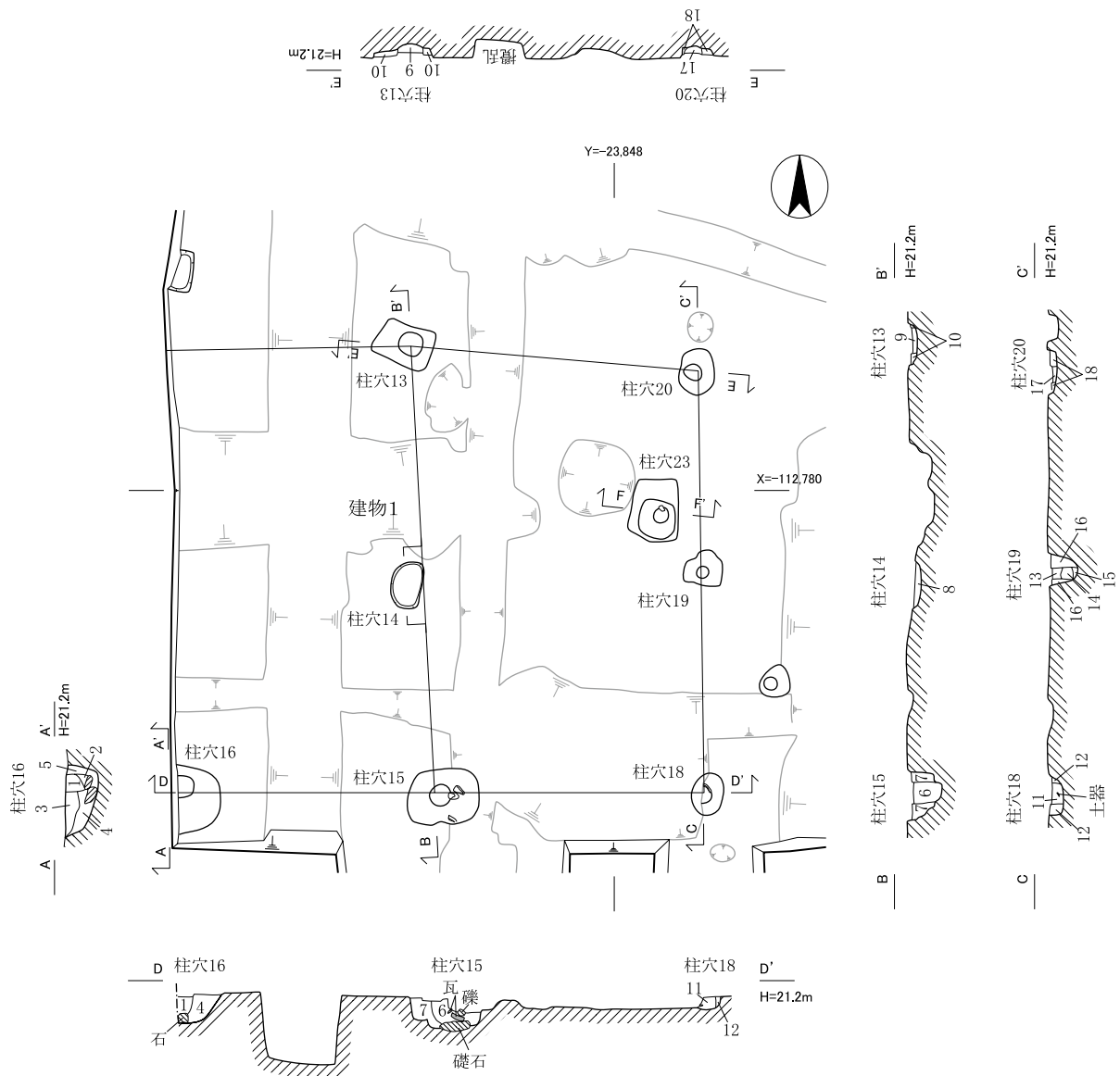
土坑48(図12) 2区南西で検出した。方形周溝墓1の南西部に削平を受けており、西部は攪乱によって東西1.76m、南北0.52m、深さ0.17m程度残存する。遺物は出土しなかった。埋土は黒褐色砂泥(10YR2/2)に褐色砂泥(10YR4/4)が多量混じる。

土坑1(図13) 1区の北側で検出した。東西0.66m、南北0.52m、深さ0.16mを測る。土坑底面から須恵器短頸壺が出土しており、6世紀中葉頃に属するものと考えられる。

(4) 平安時代の遺構(図9、図版3)

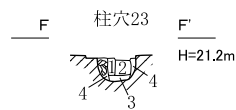
建物1(図14、図版3・4) 2区南西部で検出した掘立柱建物である。方位は北に対して約3°西に振れる。梁行2間、桁行2間を検出したが、建物の大部分は調査区外にのび、全体は不明である。柱間は梁行が約1.8m(6尺)、桁行は約2.2~2.4m(7.5~8尺)である。柱穴の掘形は一辺0.3~0.4mの隅丸方形のものや、径が0.3~0.6mの円形のものもある。深さは検出面から0.08~0.3mである。東側に並ぶ柱列の掘形の直径が他より一回り小さいことから、東側に庇が付く建物の可能性が考えられる。柱穴15・18の柱痕跡から平安京Ⅲ期古段階の土師器片が出土した。

建物2(図15、図版4) 2区北東部で検出した掘立柱建物である。方位は北に対して約5°西に振れる。柱間は梁行が約2.4m(8尺)であり、西側には等間の柱穴が検出できなかったため、梁行2間の東西建物で東へ延びると考えられる。柱掘形は隅丸長方形を呈し、一辺0.5~0.9mで、深



建物1

- 1 10YR3/3暗褐色砂泥 土器片と炭化粒少量混
 - 2 10YR7/4にぶい黄褐色粘質シルト
10YR4/1褐色砂質シルト混
 - 3 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト
10YR4/1褐色砂質シルト混
 - 4 10YR3/4暗褐色砂泥 粘土ブロック少量混
 - 5 10YR7/8黄褐色粘質シルト
10YR5/1褐色砂質シルト混
 - 6 10YR3/2黒褐色砂泥
 - 7 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 炭化粒少量混
 - 8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
 - 9 10YR4/2灰黄褐色砂泥
 - 10 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
 - 11 10YR3/2黒褐色砂泥 土器片多量混
 - 12 10YR3/3暗褐色砂泥 土器片少量混
 - 13 10YR3/3暗褐色砂泥 粘質
 - 14 10YR4/6褐色砂質シルト 炭化粒少量混
 - 15 10YR4/4褐色砂質シルト
 - 16 10YR3/4暗褐色砂泥 炭化粒と土器片少量混
 - 17 10YR2/3黒褐色砂泥
 - 18 10YR3/3暗褐色砂泥
- (柱穴16)
- (柱穴15)
- (柱穴14)
- (柱穴13)
- (柱穴18)
- (柱穴19)
- (柱穴20)



柱穴23

- 1 10YR3/4暗褐色砂泥 土器片と炭化粒が少量混
- 2 10YR3/3暗褐色砂泥 φ1cmの礫と土器片と炭化粒が多量混
- 3 10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト
- 4 10YR4/4褐色砂質シルト 10YR3/3暗褐色ブロック混 土器片と炭化粒が少量混

図14 建物1・柱穴23実測図 (1:60)

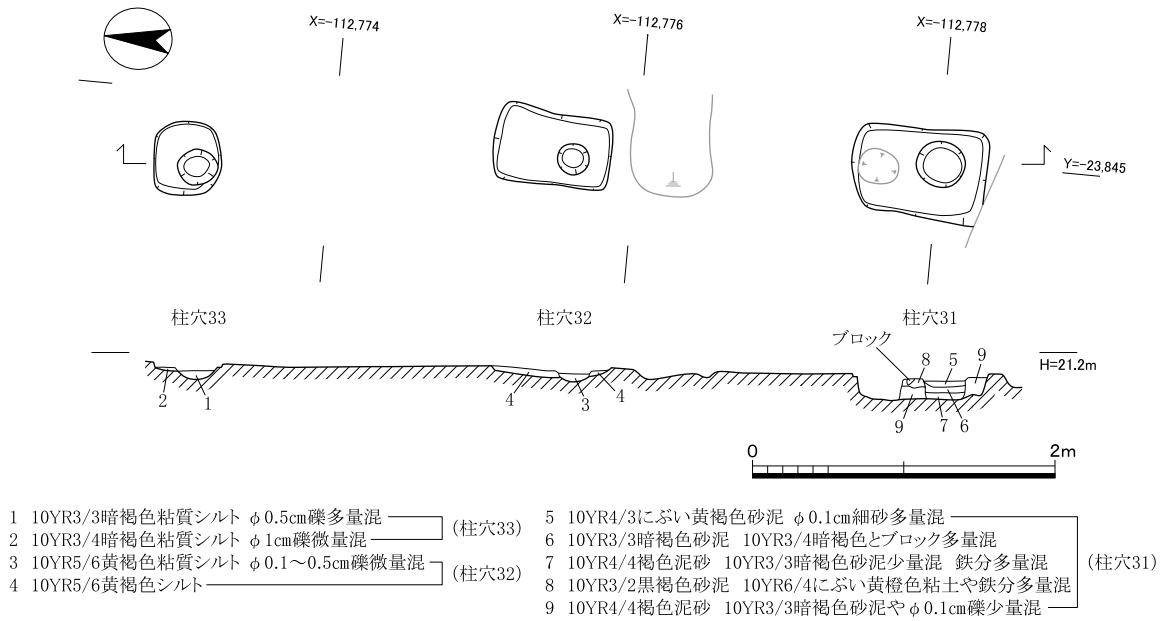


図15 建物2実測図(1:50)

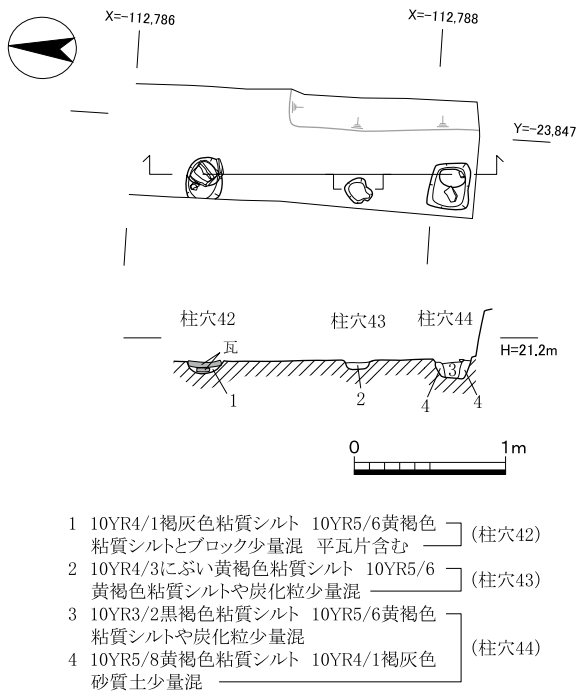


図16 柱穴42~44実測図(1:50)

さは検出面から0.08~0.15mである。柱掘形は北側ほど小さく浅くなる。これは、当時は検出状況よりも北から南への傾斜が強く、後世の耕作行為によって削平されたためと考えられる。柱穴31から土師器の高台片が出土したものの、小片であり、時期判定は不可能である。

柱穴42~44(図16、図版4) 針小路の道路敷設状況を確認するため拡張区を設定したが、築地や側溝などは検出されず、推定針小路路面上で平安時代の柱穴42~44を検出した。柱掘形は一辺0.15mの隅丸方形のものや、径が0.15m~0.3mの円形のものもある。深さは検出面から0.05~0.12mである。柱穴42と44の埋土では、平瓦片を検出した。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃				
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV				
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

4. 遺物

遺物は、整理箱で5箱出土した。種類は、土器類が4箱、瓦類が1箱である。土器類には、弥生時代の壺が3点、土師器皿25点、灰釉陶器1点、須恵器1点が出土した。そのうち弥生土器壺の2点はほぼ完形で出土したが、他の大半は細片であり、復元・図示できるものは少ない。土師器や灰釉陶器はいずれも口縁部の小片であるため、器高・口径は復元できなかった。瓦類は、平瓦14点、丸瓦2点などが出土し、軒瓦は出土しなかった。丸瓦は、調査区全体で破片数にて2点のみ出土したが、いずれも小片で摩滅が著しく各部調整が不明瞭であるため、図化はできなかった。

以下では、時期の古い順に主要な遺構から出土した遺物について概要を述べる。

(1) 弥生時代から古墳時代の遺物（図17、図版5）

弥生時代から古墳時代の遺物には、弥生土器壺・須恵器がある。

1・2は、土坑47から出土した弥生土器壺である。1は、胴部外面にススが付着している。口縁部の内面に突起が3箇所設けられている。器面全体に剥離が進み、調整が不明瞭ではあるが、頸部内面や胴部下半の内面には横ハケ目、外面には横ミガキがわずかに残る。底部外面には縦ハケ目を施す。胎土はφ0.2cm程度の砂粒を含んでおり、全体的に橙色（7.5YR6/6）を呈する。弥生時代中期前半と思われる。

2は、胴部外面や底部外面にススが付着している。口縁部を上下にわずかに拡張させて端面を形成し、上端に刺突文を施す。頸部や胴部上半部にかけては10本1単位の櫛描直線文を3条施している。頸部から胴部にかけては縦ミガキ調整後、胴部中位に横ミガキを施す。胴部内面には、縦ハケ目調整を施し、指押さえの痕跡がわずかに残る。胎土は精良であり、灰黄褐色（10YR6/2）を呈する。弥生時代中期前半と思われる。

3は、広口長頸壺の口縁部から頸部である。方形周溝墓1の周溝の南西部から出土したが、底から少し浮いた状態であった。口縁部の端面を成形した後、端部に指押さえのような円形の文様をめぐる。頸部には、6本1単位の櫛描直線文を6条めぐる。頸部内面には剥離が進んでいるものの、横ミガキ調整がわずかにみられる。胎土はφ0.2cm程度の砂粒を含んでおり、にぶい黄橙色

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代 ～古墳時代	弥生土器、須恵器		弥生土器3点、須恵器1点	0箱	1箱
平安時代	土師器、灰釉陶器、瓦		土師器7点、灰釉陶器1点、瓦3点	0箱	2箱
合計		6箱	15点（3箱）	0箱	3箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

土坑47

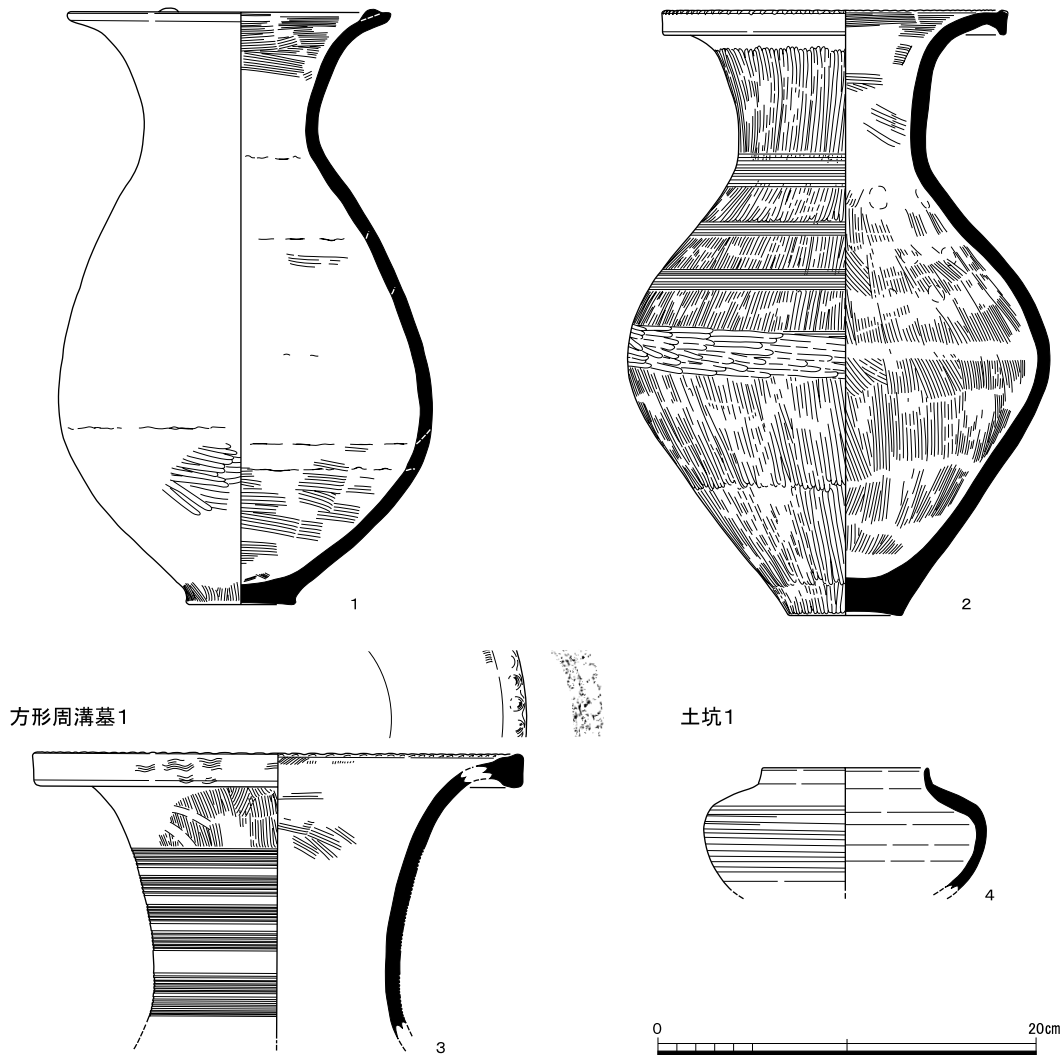


図17 弥生時代から古墳時代の遺物実測図（1：4）

(10YR7/3) を呈する。弥生時代中期前半と思われる。

4は、土坑1から出土した須恵器短頸壺で、口縁部や胴部の半分のみ残存する。内外面ともに回転ナデによる調整を施す。胎土は精良で砂粒を含まない。焼成は良好で硬質である。灰色（N6/0）を呈する。口径6.6cm。時期は6世紀代と思われる¹⁾。

(2) 平安時代の遺物（図18、図版5）

土器類 5～11は土師器である。5は建物1の柱穴16柱痕跡、6は建物1の柱穴18、7・8は柱穴18柱痕跡、9は柱穴23、10は柱穴23柱痕跡、11は柱穴42から出土した。5～7・9～11は皿である。口縁部の形態は外反度合いが強くなり外方へ屈曲しており、いわゆる「て」の字状口縁を呈する。器壁が非常に薄い。いずれも浅黄橙色（10YR8/3）を呈し、焼成は良好である。胎土はφ1mm以下の砂粒を少量含んでいるものもあるが、比較的精良である。時期は、平安京Ⅲ期古段階と思われる。8は杯である。口縁部や体部の内面に横ナデ調整がみられる。にぶい橙色（7.5YR7/4）

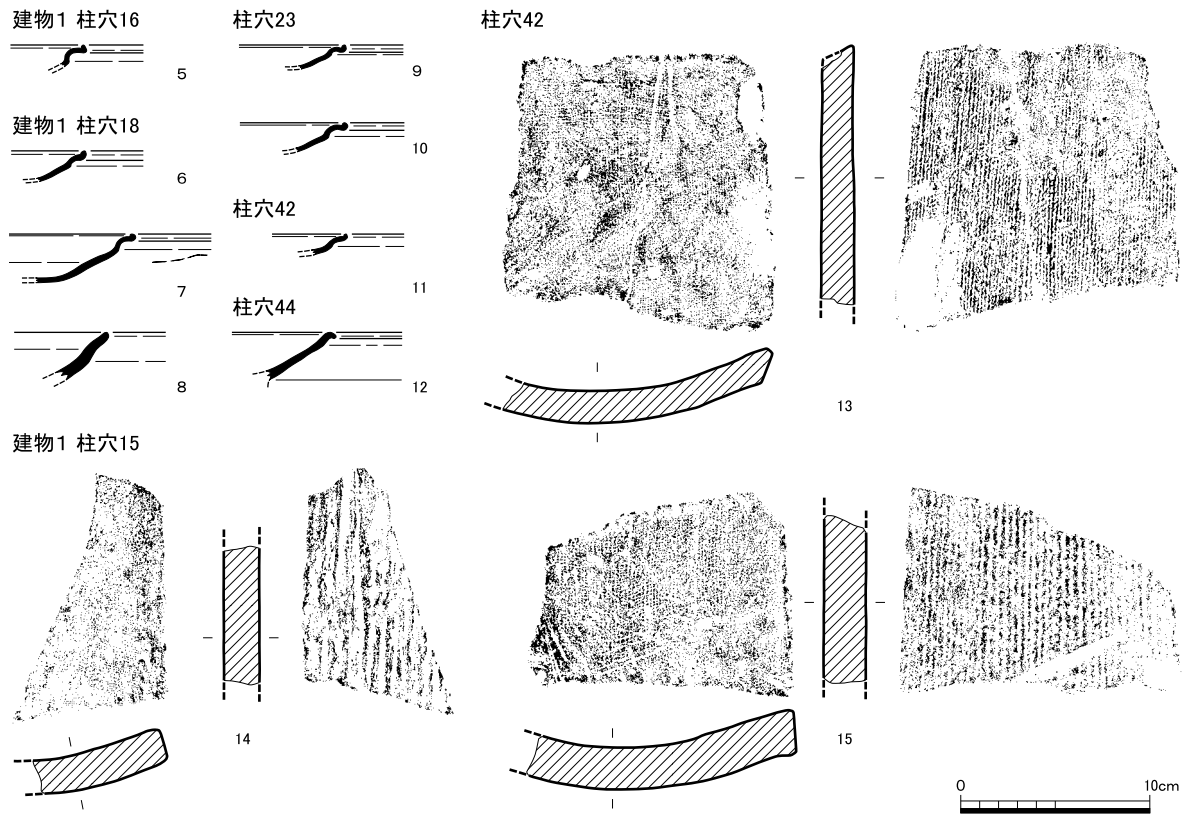


図18 平安時代の遺物拓影及び実測図（1：4）

を呈し、焼成は良好である。胎土は ϕ 1mm以下の砂粒や石英を含んでおり、やや粗い。時期は、平安京Ⅲ期中段階と思われる。

12は、灰釉陶器皿である。柱穴44柱痕跡から出土した。口縁部や内面に薄く施釉する。内外面ともに回転ナデによる調整を施す。灰白色（2.5Y7/1）を呈する。砂粒を含まず精選された胎土を使い、焼成は良好で硬質である。時期は平安京Ⅲ期古段階と思われる。

瓦類 13は、柱穴42柱痕跡から出土した平瓦である。厚さが2cm未満の薄手で、暗灰色（N3/0）を呈する。凸面の縄叩きの縄目は、幅0.2cm、5条/cm程度で細かい。凹面の布目は8×9/cm程度で細かい。胎土はやや粗、焼成はやや硬質。

14・15は、建物1の柱穴15柱痕跡から出土した平瓦である。14は、厚さが2cm未満の薄手で、灰色（N5/0）を呈する。凸面の縄叩きの縄目は、幅0.4cm、2条/cm程度で粗い。凹面の布目は10×12/cm程度で細かい。胎土はやや粗、焼成は軟質。15は、厚さが2.2cmで、灰色（N3/0）を呈する。凸面の縄叩きの縄目は、幅0.2～0.3cm、3条/cm程度で細かい方である。凹面の布目は7×8cm程度で細かい。胎土はやや粗く、凸面の離れ砂が著しい。焼成は軟質。

註

1) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年

5. ま と め

西寺跡の発掘調査は1959年に初めて本格的な発掘調査が行われて以来、今調査は、西寺境内調査30次調査となる。寺院付属施設の一つ、大衆院推定地における初めての発掘調査で、建物跡を検出したのは、大きな成果といえる。

今回の調査では、掘立柱建物を2棟検出した。調査区南西部で2間×2間以上の東側に庇が付く建物1棟、調査区北東部で2間以上の建物1棟を検出した。いずれも東西棟建物であるが、建物の大部分は調査区外に延び、全体の規模は不明である。ただし、調査地の南側にある政所院推定地の調査(図7-15・24)で検出された建物跡に比べると、建物の方位も北に対して約3～5度西に振れており、柱穴の規模や柱間などから小規模建物と考えられる。

さらに、調査地の南側には針小路北築地推定ラインが想定され、その道路敷設状況を確認するために拡張調査を行ったものの、針小路の築地や側溝は検出されず、平安時代中期の柱穴を検出した。

こうしたことから、少なくとも平安時代中期、九町と南側の十町の間に条坊小路が条坊計画¹⁾の通りには施工されていないことがわかった。また、ここには十町とは性格を異にする小規模建物が存在しており、土塀のような施設で区画されていた可能性が考えられる。今回の発見は、西寺の付属施設の機能や配置について考えられる成果を得ることができた。

なお、当地周辺には、西寺跡に先行する遺跡として唐橋遺跡が知られている。これまでの発掘調査では、竪穴建物・流路・土坑とともに弥生・古墳時代の土器片が散見されるのみで、その様相は不明であった²⁾。今回の調査では、弥生時代中期の方形周溝墓を2基検出し、近接する土坑から弥生時代の壺がほぼ完形で2点出土した。さらに、この方形周溝墓2基は、周溝を共有している可能性があり、調査地が弥生時代中期の墓域であった可能性が高い。今後、資料の増加とともに、唐橋遺跡の実態が解明されることを期待する。

註

- 1) 辻 純一「条坊制とその復元」『平安京提要』角川書店 1994年
- 2) 本 弥八郎・菅田 薫・鈴木久男「Ⅵ 唐橋遺跡」『平安京跡発掘調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
堀内明博・梅川光隆「平安京右京九条二坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1988年
堀 大輔「Ⅳ-4 唐橋遺跡 No.60」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
堀 大輔「Ⅱ-2 史跡西寺跡・唐橋遺跡 No.59」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局 2005年

圖 版



1 1区弥生時代から古墳時代全景（北東から）



2 2区弥生時代から古墳時代全景（北から）



1 1区方形周溝墓1 (北西から)



2 土坑47 (北東から)



3 土坑47土器出土状況 (北東から)



1 2区平安時代全景（北から）



2 建物1（北から）



1 建物1 柱穴15断面（東から）



2 建物1 柱穴15礎石検出状況（東から）



3 建物1 柱穴16断面（東から）



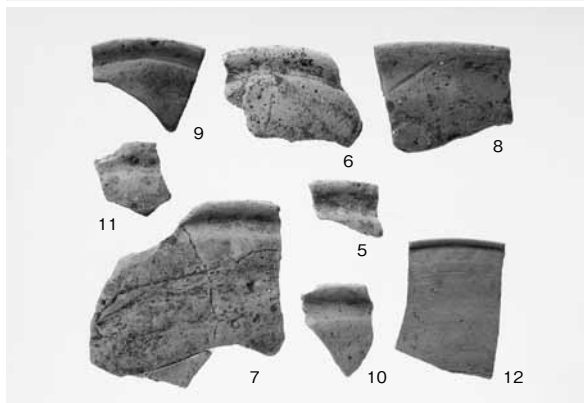
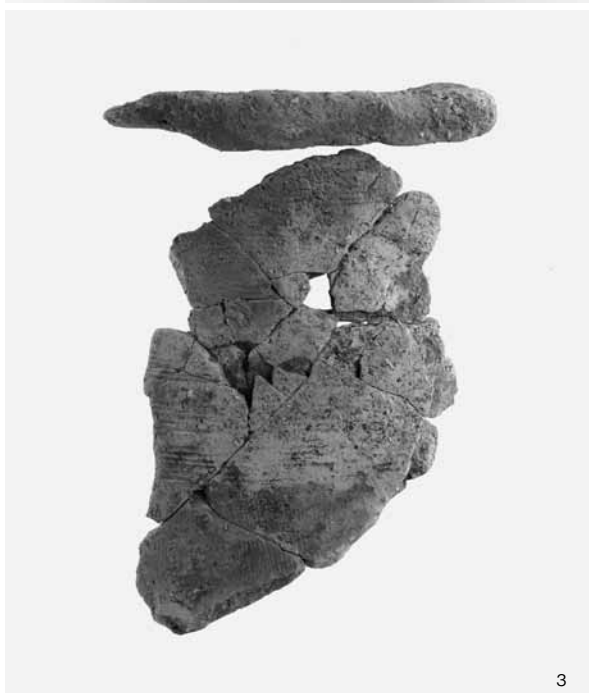
4 建物1 柱穴18断面（西から）



5 建物2（北から）



6 拡張区1 全景（北から）



報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうくじょういちぼうきゅうちょうあと・からはしいせき							
書名	平安京右京九条一坊九町跡・唐橋遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2016-4							
編著者名	李 銀眞							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2016年12月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 からはしいせき 唐橋遺跡	きょうとしみなみく 京都市南区 からはしかどわきちょう 唐橋門脇町 23-14番地	26100	1 756	34度 58分 59秒	135度 44分 20秒	2016年5月 9日～2016 年6月17日	175㎡	建物増築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
唐橋遺跡	集落跡	弥生時代 ～古墳時代	方形周溝墓、土坑	弥生土器、須恵器		方形周溝墓を2基 検出した。 弥生時代の土坑か らほぼ完形の壺が 2点出土した。 平安時代の建物跡 を2棟検出した。		
平安京跡	都城跡	平安時代	建物、柱穴	土師器、灰釉陶器、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-4

平安京右京九条一坊九町跡・唐橋遺跡

発行日 2016年12月22日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961